有明鉱は地獄だった

二人の労働者逃げ帰る

筑豊でホントに聞いた話

宮浦鉱からの出向開始の日が近づくにつれ、出向先の有明炭鉱の労働条件にようやく不安と疑いが広がりはじめている。

これは、筑豊の飯塚市の一労働組合活動家から聞いた話。その人は、有明炭鉱についての恐ろしい事実を、つぎのように話してくれた。

「三井がこんど有明炭鉱とかいう炭鉱をやるとかで、あっちこっちから人を集めているそうですね。筑豊からも、ちらちら働きにでかけるんだ、という人がでてきました。

たとえば、いまは閉山している三井山野炭鉱で、かって私といっしょに働いていた友人も二人、誘われるままに有明炭鉱に働きにでかけて行きましたが、二カ月もたたないうちに二人とも逃げ帰ってきました。

あそこの坑底での労働は、地獄だといいますよ。あのままあそこで働いていたら殺されてしまう、といいよりますよ。

それに賃金も、長崎の松島炭鉱（約千二百人ほどの労働者が働いており、組織は全炭鉱）よりも悪いとかで、こっちからでかけていった者はやがてどんどん逃げ帰ってくるのじゃなかですか」

果たして、その実態は？

新聞〝うすい〟の記事も……

この一文は、日井地域分会新聞〝うすい〟（NO・五八。三月二十三日発行）に、M生筆名で掲載されているものである。

×

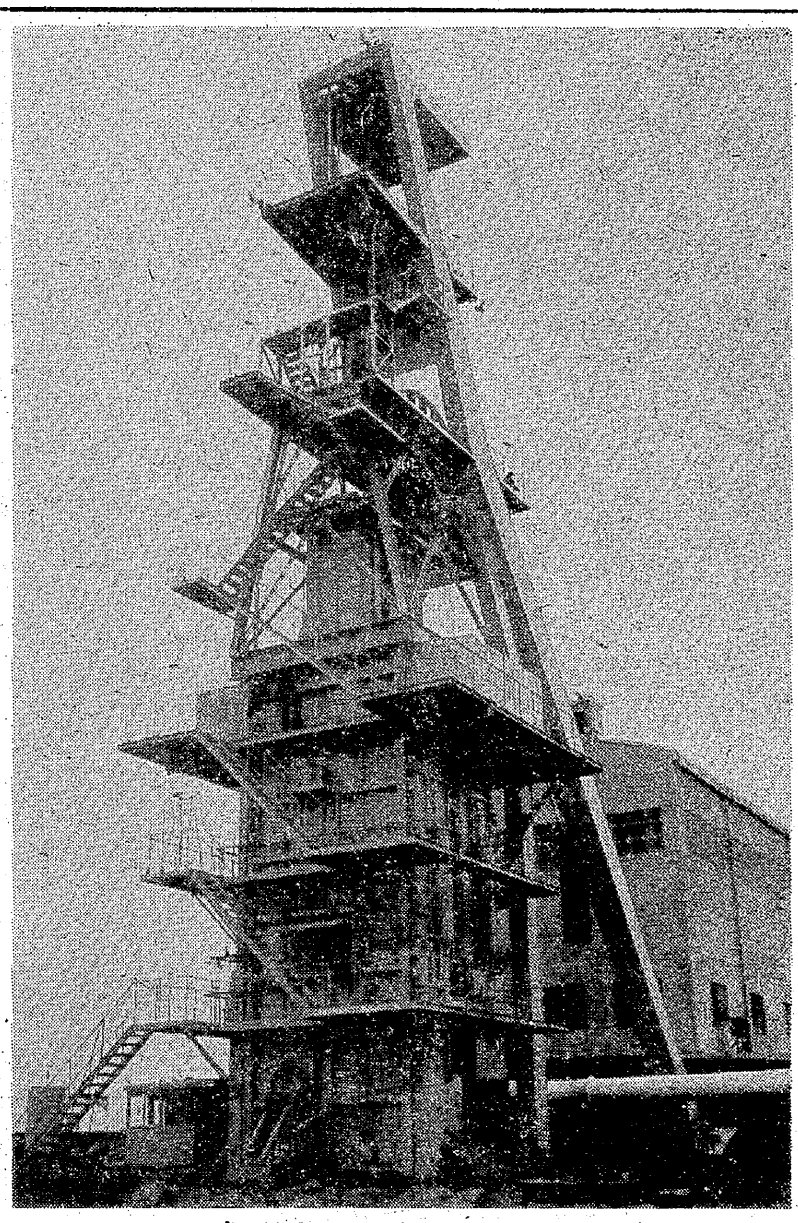
会社は昭和五十三年までに宮浦鉱をなくし、有明炭鉱は同じ年には労働者八百四十七名で、しかも一人当たり月生産能率を百三トンにし、宮浦鉱に働く残存人員を、全員三川鉱に配転するという。

坑外で働いている労働者はどうなる。

会社は三川、四山両鉱には新規採用者を受け入れていたが、宮浦鉱には三～四年前から、新規採用をしていなかった。そんなところを見ると、すでに会社は、停年退職や自己都合退職で宮浦鉱の労働者が減って行くのを待ち、宮浦鉱をなくしやすい条件をつくり上げていたのに違いない。

人の話しによれば、有明炭鉱の職制は、労働者に対するしめつけがひどく、権力を持ち、絶対服従させるそうだ。

今後の展望をつくり上げるためにも、お互いが動揺することなく、炭労全体の力でこの合理化を切り崩し、労働者の統一を実現しよう。



有明炭鉱の新竪坑やぐら

ふれだいこ

喚問日

四月一日にして下さい

――証人一同

思惑ちがい

物価――二ケタ

人気――一ケタ

（連合）

合理化の提案者――

推進者は誰なのか

新聞〝みち潮〟（港務）の問題提起

今、三池港務所の荷役課の係の統合を目指す合理化が提案されようとしています。これは大きな問題ですが、港務指導部新聞〝みち潮〟（NO・二一。三月二十三日発行）は「合理化の提案者と推進者は誰か？」と、注目すべき事実を指摘、警告しています。次は、その全文です。

現在、荷役課の係の統合がなされようとしています。その一つにショベルカー運転の合理化が、うわさになっている。

当所はかって二人で一台乗務で乗りにして、余った人員を課内配転にふり向け、人べらしとともに何でも屋をつくり、労働強化に追い込もうとしている。

係員や保安部さえ「熱くて熱くてかなわん」というくらいでは、さぞかしのことだろう。

「労働者をゴキブリとでも思っているのか」と、怒りをぶちまけ同紙はさらに主張している。

「働く者の身になって冷凍機をすえるなり、増風するなりして、快適な職場づくりのための努力をこう」

冬さえ氷が要るとは　三川

これは、三川指導部七分会新聞〝あせ〟が伝えたこと。

三川鉱では最近、擦過傷や打撲などのケガが多くなっている。これは現場が三十四～三十六度という高温に見舞われ、そのため注意力が散漫になった結果だとしている。

新労組の中では、いろいろの年令層の中にそれぞれのおもわくから、不安と心配の声が湧きだしています。

そのような中で、職制と委員、それに作業長まで加わった連合体が、「三池労組員にもれてももらされてもこまる」ということで、新労組員個々に対して圧力を加えているとも聞きます。

三池労組の代表が、会社代表と荷役課統合についての話し合いの中で、荷役課の中に生産性向上運動推進委員会というものがあって、その中で提案・検討されたのが荷役課統合問題である。新労組の方たちが創意工夫してよく協力してくれますので、会社は喜んでいます、との話がありました。

さて、だとすればこの合理化の提案者は一体誰か。また、その推進者は？

労働者を苦しめる合理化には、三池労組員も新労組員も区別することなく、絶対反対のはずです。

一人ひとりが手をつなぎ、互いに助け合い、助け合われてこそ生命と生活が守られると思います。

「三池労組員には語るな、もらすな」は、言論・表言の自由を封殺した、暗黒時代の独裁的な地位保全そのものだ。

われわれ労働者は、ドレイではないぞ。合理化反対。

×

なお、右の記事には終りに「三分会、九十郎」との記名がある。

疑われる時代感覚

労働者は虫ケラか

駐車場問題

宮浦鉱前の道路が全面駐車禁止となり、会社はささやかな駐車場を柵内につくったが、この駐車場はすぐ満車となり、締め出される車は、これまでよりますます不自由な思いをさせられるようになった。駐車場に入れるためには、平常より二十分も三十分も早く家をでなければならず、一番方のときは小川開の空地駐車なので、車で小川開まで約十分、駐車するとこんどはさらに寒風の中を歩いて会社まで七分。

これではなんのためのマイカー通勤だろうか。マイカーゆえに、かえって通勤時間が長くかかる、変テコなことになっている。

パチンコ屋は二階建の駐車場をつくって客を呼んでいるのに、三池炭鉱はわれわれに、すかしたりおどしたりしてまで出勤トク励するというのに、車の置い場さえまじめには考えない。

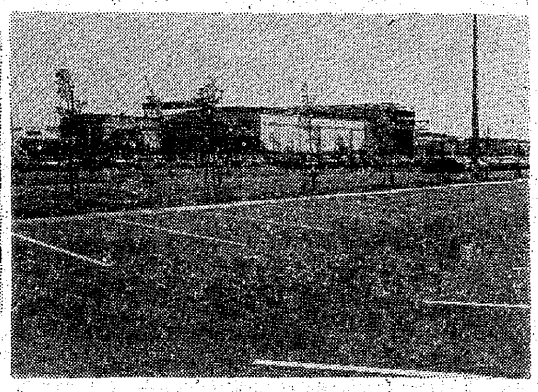
零細企業であるパチンコ屋などとは問題にならぬ程もうけている三池炭鉱が、そこに働く者の車の置き場さえできないなどということは絶対にないはずだ。

×

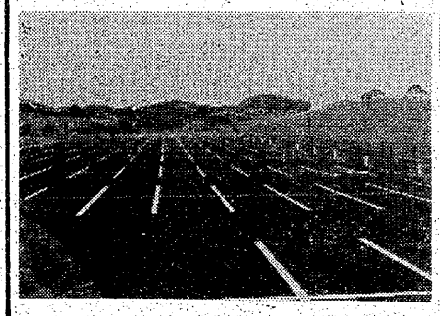
右は宮浦指導部電気分会新聞〝交流〟（NO・二九。二月二十八日発行）の嘆きだが、これは三池のすべての鉱所にそのままあてはまること。

時代をどう見ているのか。うんともすっともいわない会社の感覚を疑わぬ者はいない。それとも労働者は虫ケラか。

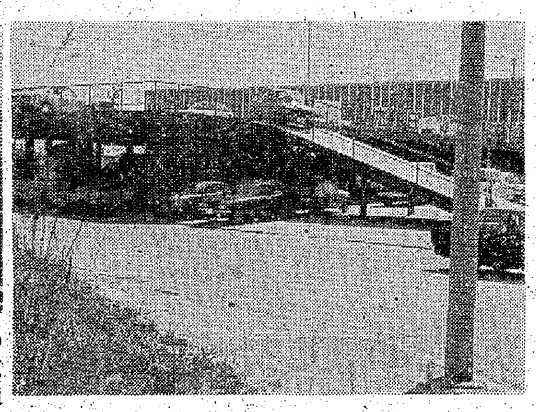
これはアップアップの三川鉱の駐車場。押し合いへシ合いしながら、並んでいる。ここに場を占めるのは、並みたいていなことではない。



これは長洲の日立造船の駐車場の一部。資本が違えばこうも違うものか。



そんな三井さんも、客商売の方のグリーンランドは、また駐車場を広げた。もうけのためにはこれこの通りで相手が労働者だと虫ケラ扱い。駐車場にさえ、三井の本性がさらけ出されている。この恥知らずが。



これは市内の某パチンコ店の駐車場。零細資本でも二階建。時代に適合するのに懸命だ。

記事訂正

本紙先号二面記事「四月上旬ゼネスト」の中で「二千トン」の活字は「二千万トン」の間違いでした。

また五面の、弥永善治さんの報告中の数字については、よくご意見を聞いた後報告します。

やむを得ないとはいえ校正ミスをおかしたことを、心からおわびいたします。

――編集部